

外国語

1 外国語はどのようなことに重点を置いて導入されるのか。

(1) 高学年における外国語科の導入の趣旨

- 中学年から、聞くこと、話すことを中心とした外国語活動（年間35時間）を導入し、外国語に慣れ親しみ、外国語学習への動機付けを高めた上で、高学年から段階的に文字を読むこと、書くことを加え、系統性を持たせた指導を行う教科（年間70単位時間）として位置付けられた。

(2) 高学年における外国語科導入の要点

ア 目標の改善

- 「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの資質・能力を明確にした上で、
 - ① 各学校段階の学びを接続させる、
 - ② 「外国語を使って何ができるようになるか」を明確にする、という観点から、国際的な基準などを参考に、小・中・高等学校で一貫した、領域別の目標が設定されている。
- 聞くこと、読むこと、話すこと[やり取り]、話すこと[発表]、書くことの五つの領域において英語の目標が設定されている。

イ 内容構成の改善

- 育成を目指す資質・能力を確実に身に付けられるよう、
 - ① 「知識及び技能」として「英語の特徴やきまりに関する事項」〔第2の2(1)〕
 - ② 「思考力、判断力、表現力等」として「情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項」〔第2の2(2)〕が整理された。
- その上で、「言語活動及び言語の働きに関する事項」〔第2の2(3)〕に、「知識及び技能」を活用して「思考力、判断力、表現力等」を身に付けるための具体的な言語活動、言語の働き等が整理され、「知識及び技能」に示す事項を活用して、言語活動を通して「思考力、判断力、表現力等」を指導することとされた。

ウ 内容の改善・充実

- 「知識及び技能」については、実際に外国語を用いた言語活動を通して、外国語の音声や文字などについて、日本語と外国語の違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにすることとされた。
- 「思考力、判断力、表現力等」については、具体的な課題等を設定し、コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、情報や考えなどを表現することを通して、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができるよう指導することとされた。

エ 学習指導の改善・充実

- 言語材料については、発達の段階に応じて、児童が受容するものと発信するものがあることに留意して指導することが明記された。
- 「推測しながら読む」ことにつながるよう、音声で十分に慣れ親しんだ語句や基本的な表現について、音声と文字を関連付けて指導することとされた。

- 文及び文構造の指導に当たっては、文法の用語や用法の指導に偏ることがないよう配慮して、コミュニケーションの中で基本的な表現として繰り返し触れることを通して指導することとされた。

オ 主体的・対話的で深い学びの実現

- 3の指導計画の作成と内容の取扱い(1)アに「児童の主体的・対話的で深い学びの実現を図るようにすること」が明記された。
- 「主体的・対話的で深い学び」は必ずしも1単位時間の授業の中で全てが実現されるものではなく、単元など内容や時間のまとまりの中で、児童や学校の実態に応じ、授業改善を進めることが求められている。
- 外国語科における学びの深まりの鍵となるのが、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」となる。

2 外国語の目標はどのように変わるのか。

【第2章第1節 外国語科の目標】

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

(1) 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること

外国語によるコミュニケーションの一連の過程を通して、このような「見方・考え方」を働かせながら、自分の思いや考えを表現することなどを通じて、児童の発達の段階に応じて「見方・考え方」を豊かにすることが重要である。

(2) コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力

外国語科の目標の中心となる部分であり、その資質・能力は、「知識及び技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で詳細な目標として明確に設定されている。

〔知識及び技能〕第1目標(1)

外国語の音声や文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについて、日本語と外国語との違いに気付き、これらの知識を理解するとともに、読むこと、書くことに慣れ親しみ、聞くこと、読むこと、話すこと、書くことによる実際のコミュニケーションにおいて活用できる基礎的な技能を身に付けるようにする。

中学年の外国語活動での「日本語と外国語との音声の違い等に気付く」ことにとどまらず、高学年の外国語科では、文字、語彙、表現、文構造、言語の働きなどについても日本語との違いに気付くこと、さらに、気付きで終わるのではなく、それらが外国語でコミュニケーションを図る際に活用される、生きて働く知識として理解されることが求められている。

また、中学年の外国語活動において外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんだことを生かし、高学年の外国語科では、中学校で身に付けるべき実際のコミュニケーションにおいて活用できる技能の基礎的なものを身に付けることになる。

ただし、「読むこと」、「書くこと」については、中学年の外国語活動では指導していないことを踏まえると、慣れ親しませることから指導する必要があり、「聞くこと」、「話すこと」と同等の指導が求められるものではないことに留意する。

〔思考力、判断力、表現力等〕第1目標(2)

コミュニケーションを行う目的や場面、状況などに応じて、身近で簡単な事柄について、聞いたり話したりするとともに、音声で十分に慣れ親しんだ外国語の語彙や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりして、自分の考えや気持ちなどを伝え合うことができる基礎的な力を養う。

コミュニケーションを行う際は、その「目的や場面、状況など」を意識する必要がある。その上で聞いたり話したりするとともに、読んだり書いたりして「自分の考えや気持ちなどを伝え合う」ことが重要になってくる。「思考力、判断力、表現力等」の育成のためには、外国語を実際に使用することが不可欠である。

外国語教育における学習過程としては、

- ① 設定されたコミュニケーションの目的や場面、状況等を理解する
 - ② 目的に応じて情報や意見などを発信するまでの方向性を決定し、コミュニケーションの見通しを立てる
 - ③ 目的達成のため、具体的なコミュニケーションを行う
 - ④ 言語面・内容面で自ら学習のまとめと振り返りを行う
- といった流れの中で、学んだことの意味付けを行ったり、既得の知識や経験と、新たに得られた知識を言語活動で活用したりすることで、「思考力、判断力、表現力等」を高めていくことが大切になる。

〔学びに向かう力、人間性等〕第1目標(3)

外国語の背景にある文化に対する理解を深め、他者に配慮しながら、主体的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとする態度を養う。

「知識及び技能」を実際のコミュニケーションの場面において活用し、考えを形成・進化させ、話したり書いたりして表現することを繰り返すことで、児童に自信が生まれ、主体的に学習に取り組む態度が一層向上するため、「知識及び技能」及び「思考力、判断力、表現力等」と「学びに向かう力、人間性等」は不可分に結びついている。児童が興味をもって取り組むことができる言語活動を易しいものから段階的に取り入れたり、自己表現活動の工夫をしたりするなど、様々な手立てを通じて児童の主体的に学習に取り組む態度の育成を目指した指導をすることが大切である。

【第2章第2節 英語の目標】

英語学習の特質を踏まえ、以下に示す、聞くこと、読むこと、話すこと〔やり取り〕、話すこと〔発表〕、書くことの五つの領域別に設定する目標の実現を目指した指導を通して、第1の(1)及び(2)に示す資質・能力を一体的に育成するとともに、その過程を通して、第1の(3)に示す資質・能力を育成する。

前述の外国語科の目標を踏まえ、具体的な目標が設定されており、小学校段階から児童の発達の段階に応じて、五つの領域ごとに、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を一体的に育成する目標が設定されている。

また、これら外国語科の目標については、学年ごとに示すのではなく、より弾力的な指導ができるよう、2学年間を通した目標とされている。

3 内容はどのように変わるのか。

(1) 英語の特徴やきまりに関する事項〔知識及び技能〕

ア 音声

「現代の標準的な発音」、「語と語の連結による音の変化」、「語や句、文における基本的な強勢」、「文における基本的なイントネーション」、「文における基本的

な区切り」について、言語活動と併せて指導を行い、音声で十分慣れ親しませることを通して気付かせたり、身に付けさせたりする。

イ 文字及び符号

文字の指導に当たっては、文字の名称を聞いてその文字を選んだり、文字を見てその名称を発音したりすることができるようにする。文字の細部を指導するのではなく、コミュニケーションを行うために文字を書くことを意識させる。

ウ 語、連語及び慣用表現

外国語活動を履修する際に取り扱った語を含む600～700語を指導する。語彙については、児童の発達の段階に応じて、聞いたり読んだりして理解できるように指導すべき語彙（受信語彙）と話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙（発信語彙）があり、特にその中で、聞いて意味が理解できるようにする語彙と話して表現できる語彙が中心になることに留意する。

エ 文及び文構造

言語活動の中で、文法の用語や用法の指導を行うのではなく日本語と英語の語順の違い等の気付きを促したり、基本的な表現として繰り返し聞いたり話したりするなどして活用させたりする。

(2) 情報を整理しながら考えなどを形成し、英語で表現したり、伝え合ったりすることに関する事項〔思考力、判断力、表現力等〕

ア 身近で簡単な事柄について、伝えようとする内容を整理した上で、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを伝え合うこと。

自分の考えや気持ちを伝え合うに当たっては、英語で伝え合うだけでなく、自分の考えと相手の考えを比較したり、新たな考えを知識として取り入れたりしながら、自分の考えを再構築することが大切である。

また、こうした言語活動の質の高まりによる自分の考えの変容について、自ら学習のまとめを行ったり、振り返りを行ったりすることで、「思考力、判断力、表現力等」を高める必要がある。

イ 身近で簡単な事柄について、音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を推測しながら読んだり、語順を意識しながら書いたりすること。

「推測しながら」読むとは、絵や写真等、言語外情報を伴って示された英語の意味を推測して読んだり、音声で十分慣れ親しんだ語句が文字のみで示された場合、文字の音を頼りに、その語句の読み方を推測して読んだりすることを指している。その際、児童が「思考力、判断力、表現力等」を働かせてコミュニケーションを行うことができるような目的や場面、状況等を設定する必要がある。

また、「語順を意識しながら」書くことについては、音声で十分慣れ親しんだ語句や表現を書き写したり、例の中から言葉を選んで書いたりする活動を通して、文を書く際に、どのように語を並べると自分の伝えたいことが適切に伝わるかを考えて書くことが重要であることを示している。

(3) 言語活動及び言語の働きに関する事項

○ 言語活動に関する事項

ア 聞くこと

聞いて理解した活動とイラストや写真などの非言語情報とを照らし合わせる活動に加えて、事実や出来事などの具体的な情報を聞き取る活動、ある程度まとまりのある英語を聞いて必要な情報を得る活動が示されている。どの児童も自信をもって活動できるよう、内容や英語の速さに留意したり、段階的かつ繰り返しの指導を行ったり、視覚資料を提示して内容理解の助けとなる支援を行ったりする。

イ 読むこと

(ア)、(イ)では、文字の名称を認識したり、発音したりする活動が示されている。
文字の音の読み方を指導する際は、文字の名称の読み方との混同や種類の多さによる混乱から難しさを感じることがないように留意し、代表的なものを取り上げるようにする。

(ウ)の活動で示される英語は、関連する絵や写真などとともに示された語句や1～2文程度の単文である。音声で十分慣れ親しむ活動や文字の読み方を適切に発音する活動などを段階的に取り入れて指導を行う。

(エ)に例示される絵本には、何らかのテーマについて話の理解が分かりやすく書かれていたり、同じ表現が意図的に繰り返し示されていたりという特徴がある。絵本のほかには、日記、身近な事柄についての紹介文も同様の特徴を有していれば、読ませる素材として適している。

(エ)の事項が示している活動として、「文を読んで、その中から音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現を識別する活動」と、「音声で十分に慣れ親しんだ簡単な語句や基本的な表現で書かれた文を読んでその意味を捉える活動」の二つが挙げられており、いずれの活動に取り組みせる場合も、読ませる語句や表現に十分に慣れ親しませることが必須である。

ウ 話すこと [やり取り]

(イ)では、児童が自分の考えをもつことができるよう、話題についての知識を得たり、それらを説明したりそれらに対する気持ちを伝える表現を言うことができるようになったりするための指導を、単元や授業の中で必要に応じて行う。

(ウ)では、「短い会話」の中で、「自分に関する簡単な質問」に答えたり、そのような質問をしたりする即興的な活動に取り組むことが示されている。

エ 話すこと [発表]

(ア)については、多様な語句を扱うことから、視聴覚教材を活用したり、複数回の授業で同じ動詞や連語を繰り返し使用するなど、何度も聞いたり言ったりすることができるような指導を行う。

(イ)の自己紹介については、児童が活動に取り組む必然性を感じるよう、学校の状況や児童の実態に応じた工夫をする。

(ウ)については、全ての児童が自分の考えをもったり、それを伝えるための英語表現を言うことができるようになったりするための指導を、単元や単元時間の授業の中で行う。

オ 書くこと

(ア)については、「書くこと」の指導事項のうち最も基本的なものとして、最終的に児童が何も見ることなく自分の力で活字体の大文字、小文字を書くことができるように指導する。

指導に当たっては、以下のことに留意する。

- ・ 「聞くこと」や「読むこと」の活動を経るなどの順序性を踏まえる。
- ・ 児童の実態に応じて、一度に扱う文字の数や種類に配慮する。
- ・ 書く目的をもたせたり、ゲーム的要素を取り入れたりするなど、学習意欲を高める工夫を行う。
- ・ 「書くこと」の活動に際しては、授業において十分な時間を確保するとともに、四線上に正しく書くことができるようにする。
- ・ 年間を通じて、文字を書くことができているか、できるようになってきているかを丁寧に見届け、指導に生かす。

(イ)～(エ)は、書かれたものを書き写したり、参考にしたりしながら書く活動が示されている。「相手に伝えるなどの目的を持って」とあるように、適切なコミュニケーションの目的や場面、状況が与えられた中で、自分の気持ちや考えなどを書いて伝え合うようにさせることが大切である。

「書き写す」活動に関して、(イ)では「簡単な語句」、(ウ)では「基本的な表現」が示されているが、いずれも「音声で十分慣れ親しんだ」ものであることに留意する。なお、(ウ)については、児童が文を書き写すことになることから、「語と語の区切り」についての指導を行う。

(エ)における「書く」とは、例となる文を見ながら、自分の考えや気持ちを表現するために、一部を別の語に替えて書くことを表している。その際、「例の中から言葉を選んで」と示されているように、児童が何も見ることなく自分の力で書くことを求めていることに留意し、丁寧な指導を行う。

ローマ字表記については、国際的な共通語として英語を使用する観点から、いわゆる「ヘボン式ローマ字」で表記することを指導する。

○ 言語の働きに関する事項

ここでは「言語の使用場面」や「言語の働き」について特に具体例を示している。これらを手掛かりとして、日常の授業において、実際の言語の使用場面の設定や言語の働きを意識した指導を行う。

4 指導計画の作成と内容の取扱いで特に配慮すべきことは何か。

(1) 指導計画の作成上の配慮事項

- ・ 単元など内容や時間のまとまりの中で、主体的・対話的で深い学びの実現を図る。
- ・ 外国語活動や中・高等学校における指導と円滑に接続できるよう語彙や表現、ゲームや活動、題材や場面設定等の配列を工夫したり、指導方法や学習環境等を系統的に行えるよう配慮したりする。
- ・ 領域別の目標と関連付けられた学年ごとの学習到達目標を各学校において設定する。
- ・ 実際に英語を使用して互いの考えや気持ちを伝え合うなどの言語活動を行う際は、言語材料について理解したり練習したりするための指導を必要に応じて行う。また、中学年の外国語活動で扱った簡単な語句や基本的な表現などの学習内容を繰り返し指導し定着を図る。
- ・ 児童が英語に多く触れることが期待される英語学習の特質を踏まえ、必要に応じて、短時間学習の実施等により、教育課程内の外国語科の授業時数を確保するなど、「時間」という資源をいかに活用するかという視点で指導計画を見直し、カリキュラム・マネジメントにより計画的・組織的に教育活動の質の向上を図っていく。
- ・ 障害のある児童などの指導に当たっては、学習活動を行う場合に生じる困難さに応じた指導内容や指導方法の工夫を計画的、組織的に行う。

(2) 内容の取扱い

- ・ 言語材料の指導については、必要に応じて平易なものを再学習してから難しいものに取り組むなどの配慮を行う。
- ・ 指導計画を作成するに当たっては、高度な言語活動を目指そうとするあまり、児童に過度の学習負担を強いることのないようにする。
- ・ 「音声と文字とを関連付けて指導すること」とは、音声で十分慣れ親しんだ表現について読んだり書いたりすることを求めたものであり、「発音と綴りを関連付けて指導すること」とは異なることに留意する。

- ・ ペア・ワークやグループ・ワークなどの学習形態を適宜取り入れ、自分から話を切り出したり、相手の発話に即座に応答したりしながらやり取りを行う活動を行う。その際、機械的な練習にならないよう、多様な言語の使用場面を設定したり、既得の語句や表現を使用して、会話を広げるよう促したりする。

5 評価規準はどのように作成するのか。

外国語科の学習評価は、「内容のまとまりごとの評価規準」に照らして行う。外国語科における「内容のまとまり」とは、学習指導要領の英語の目標として示される五つの領域のことである。

(1) 学年ごとの目標と評価規準

五つの領域別の目標の記述は、資質・能力の三つの柱を総合的に育成する観点から、各々を三つの柱に分けずに一文ずつの能力記述文で示している。学習指導要領では、学年ごとの目標は各学校において設定することとしているため、各学校においては、外国語科の目標、「内容のまとまりごとの評価規準等」に基づき、児童の実態等に応じて、「学年ごとの目標」を設定する必要がある。

五つの領域別の「学年ごとの目標」は、一文の能力記述文で示すことが基本的な形となる。一方で、「学年ごとの目標」に対応する評価規準は「内容のまとまりごとの評価規準」を踏まえて、3観点で記述する。

【第6学年 内容のまとまりごとの評価規準（話すこと [やり取り]）】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
英語の特徴やきまりに関する事項を理解している。[知識] 実際のコミュニケーションにおいて、日常生活に関する身近で簡単な事柄や、自分や相手のこと及び身の周りの物に関する事柄などについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを伝え合う技能を身に付けている。[技能]	コミュニケーションを行う目的、場面、状況などに応じて、日常生活に関する身近で簡単な事柄や、自分や相手のこと及び身の回りの物に関する事柄などについて、簡単な語句や基本的な表現を用いて、自分の考えや気持ちなどを伝え合っている。	外国語の背景にある文化に対する理解を他者に配慮しながら、主体的に英語を用いて伝え合おうとしている。

(2) 単元ごとの評価規準

単元ごとの評価に当たっては、(1)の考え方に基づいて評価規準を設定する。

【単元ごとの評価規準例（話すこと [やり取り]）】

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
<u>疑問文のうち、doで始まるもの、</u> <u>疑問詞whatで始まる構文</u> （言語材料） について理解している。[知識] <u>自分や相手のこと</u> （事柄・話題） について、 <u>Do you ~?やWhat do you ~?</u> （言語材料）を用いて、 <u>事実や自分の考えや気持ちなど</u> （内容） を伝え合う技能を身に付けている。[技能]	<u>新しくやってきたALTの</u> <u>ことを理解したり自分のこと</u> <u>を伝えたりするために</u> （目的等）、 <u>自分や相手のこと</u> （事柄・話題） について、簡単な語句や基本的な表現を用いて、 <u>自分の考えや気持ちなど</u> （内容） を伝え合っている。	<u>新しくやってきたALTの</u> <u>ことを理解したり自分のこと</u> <u>が伝わるように</u> （目的等）、 <u>自分や相手のこと</u> （事柄・話題） について、簡単な語句や基本的な表現を用いて、 <u>自分の考えや気持ちなど</u> （内容） を伝え合おうとしている。

※ 言語活動への取組に関して見通しを立てたり振り返ったりして自らの学習を自覚的に捉えている様子については、特定の領域・単元だけでなく、年間を通じて評価する。